WORD

Little Press

vol.14

2012 DEC.

雪が積もれば、見慣れた景色がキラメク世界に。

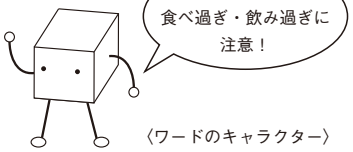
http://word-tt.jp

ご意見・ご感想をお願いします！

『ワード リトル・プレス』へのご意見・ご感想をお寄せください。
「もっとこんなふうにしたら、おもしろいのに」「こんな内容を掲載してほしい」「この記事に共感！」……どんなメッセージでも歓迎です！ 今後の制作の参考にさせていただきます。

メール word@w5.dion.ne.jp
もしくは、スタッフに直接お声かけください。

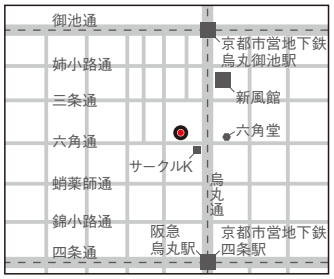
twitter @vword Follow



〈ワードのキャラクター〉
トコトンくん

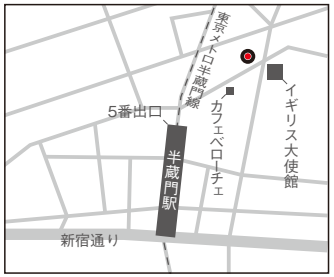
京都オフィス

〒604-8164
京都市中京区六角室町東入骨屋町143
G&Gビル3F
TEL. 075(222)1104(代)
FAX. 075(256)5516
E-mail. word@w5.dion.ne.jp



東京オフィス

〒102-0082
東京都千代田区一番町4-5
ニューライフ一番町203
TEL. 03(3556)6160
FAX. 03(3556)1132
E-mail. word-tokyo@m7.dion.ne.jp



神保町 カフェ散歩ⓨ

愛すべきレトロな佇まい。都会の喧騒から閉ざされた、ほの暗く落ち着いた店内。使い古された木のテーブルとビニールレザーの赤いイス。

日本屈指の古書店街、神保町には、本を片手に何時間でも過ごせそうなカフェが点在しています。

はじめてその扉をひらいたのは、4年前の春でした。当時、中国語を勉強していた友人が、資料を買うために神保町へ行くというので、私も興味本位についていくことにしたのです。

友人はしっかり者なので、立ち寄るべき書店を事前に調べ、買うべき資料をすばやく見つけ、あっという間に用事を済ませました。一方の私は、書店のにおいを堪能し、目につくものをあれこれと物色し、読めもしない中国語の絵本を購入し、たいへん満足して店を出たのでした。

とりとめのないおしゃべりをしながらぶらぶらしていると、どちらからともなくどこかで休もうという話になり、足の向くままに路地裏をさまよい、たどりついたのが、昭和モダンな喫茶店「ラドリオ」だったのです。

レンガ造りの店内にシャンソンやジャズが流れるこの店は、神保町では老舗の昭和24年創業で、日本ではじめてウィンナーコーヒーを出したという歴史あるお店。ここだけ時間がゆっくり流れているのではと錯覚するほどノスタルジックな雰囲気で、ひとりでじっくりものを書いたり、読書をしたりするのにもぴったりです。

本の街を歩き疲れた私たちは、このちいさな扉をあけたとき、ふしぎとここを目指して来たような気分になったのでした。

ウィンナーコーヒーのウィンナーたる部分のてんこもり具合に心がときめきます

こんにちは！
九月から京都でお世話になっています、
澤田利津子と申します。
新人にして平均年齢をぐんと引き上げましたが、みなさんは大変親切に教えて下さり、とっても楽しく仕事をさせて頂いています。
これまでもDTPの経験はあるのですが、インデザインがいよいよ主流になってきた頃、覚える機会のないまま一旦この仕事から離れてしまい、最近になってやっぱりもういちどDTPがしたい！　インデザインを使いこなせるようになりたい！　と思い、この度採用していただきました！（ホントに感謝です）
因みにリラックマファミリーの大ファンで、日々癒されています。
以後、
宜しくお願い致します。

最後に、最近友人の身に起こったことを詠ってみたいと思います。

〝人生を　投げた矢先に　モテ期くる〟

いくつになっても人生いつ何が起こるか分からないということでした……

重箱の隅的京都案内 IX

ちゃんと読めたら一人前？

京都の地名は難しいとよく言われます。
たとえば、椥辻、直違橋、万里小路、車折、物集女、上終町……挙げればキリがありません。正しい読み方は、なぎのつじ、すじかいばし、までのこうじ、くるまざき、もずめ、かみはてちょう。言われてみれば、なんとなくそんな名残もある読み方ですが、一口を「いもあらい」と読むとなると、もはやとんちの世界です。
とはいえ、京都人にとってはかなり当たり前の読み方を「難読」と言われて困惑することもあります。
たとえば太秦、壬生、鹿ケ谷、双ケ丘、糺の森、上七軒など。（念のために、うずまさ、みぶ、ししがたに、ならびがおか、ただすのもり、かみしちけん、です）
こうしたわかりやすい難読地名のほかに、一見、なじみのある漢字で書かれているのに、読み方にちょっとした落とし穴があるというパターンもあってややこしい。
たとえば「烏丸通」。京都を南北に走る幹線道路で、京都人にとっては「からすま」以外の読み方はありえないのに、意外に間違われるのが「からすま**る**」。「る」が消えてしまっているのが誤読を誘うのでしょう。同じく消えるパターンは「御幸町通」。「ごこ**う**まち」ではなく「ごこまち」が正解です。
逆に読みが増えているパターンもあります。たとえば「釜座通」は「かま**ん**ざ」と読み、なぜか「ん」が増えています。今では「あねこうじ」で通じる姉小路通も、「あね**や**こうじ」が本来の正しい読み方。
増える文字としては、「の」も困りものです。同じ小路でも、富小路通は「とみ**の**こうじ」、綾小路通は「あや**の**こうじ」なのに、錦小路通は「にしきこうじ」で、押小路通は「おしこうじ」と、「の」は入りません。ちなみに柳馬場通は「やなぎ**の**ばん**ば**」と「の」と「ん」の合わせ技になります。
もうひとつややこしいのは「まち」と「ちょう」の使い分け。御幸町通は「ごこ**まち**」なのに、その隣の通りの麩屋町通は「ふや**ちょう**」。竹屋は「まち」だけど（竹屋町通）、車屋は「ちょう」（車屋町通）。どちらがスタンダードだとか、「まち」と「ちょう」を区別するルールもありません。「だって、〝ふやちょう〟は〝ふやちょう〟やん」と言われるのがオチでしょう。
まあでも、心配しないでください。道を尋ねてきた人がこうした間違いをしても、京都人は面と向かって「その読み方は違いますよ」と言って恥をかかせることはありません。素知らぬふりで、「ああ、からす**ま**通りですね」と言い換えて答えてくれます。そこをちゃんと聞きとって学べるかどうか、それが、京都上級者になれるかどうかの分かれ道です。　（合）

2012年 ワードの重大出来事 トップ5

今年もワードの１年を振り返ってみました。
全力投球の日々が思い出されます。

1 東京国際ブックフェアに、ワード単独で出展〈7月〉

今年はワード単独でブースを出展しました！
ブースデザインにも初挑戦で四苦八苦。
赤と白をキーカラーに、
入りやすい空間を目指しました。
トコトンくんも大活躍！！
多くの方と出会えたブックフェアでした。

初登場！
レインボー
トコトンくん!!

※このトコトンくんは（梅）の手作りです。京都WORDのテーブルの上でお待ちしております。

2 ワード編の書籍の第２弾『京のつめたいもん』（光村推古書院）発行〈5月〉

3 WEBを大々的にリニューアル〈6月〉

4 ●デザイナー・（む）が独立〈4月〉 ●編集・営業・大西が入社〈6月〉 ●DTP・澤田が入社〈9月〉

5 長年（20年以上！）愛用してきた湯沸かし・保温ポットが壊れる〈11月〉

私事ですが、今年は思わぬ病にかかり、多くの方にご心配をおかけしました。来年は健康に気をつけて、ますますパワーアップしたいと思います。（ま）

いいおとなの図工時間

～語り継がれるモノものがたり～（その2）

おおに

みなさんは、ファーバーカステルという会社をご存じでしょうか。会社の名前は知らないという人がいたとしても、この会社は鉛筆といえばだれもがイメージするであろう「六角形の木軸鉛筆」を世界で初めて発売した会社なのです。まさに、今でも世界中で使われている鉛筆の世界基準を作り上げた会社だといえます。

ファーバーカステル社はドイツにある文具メーカーで、その創業は1761 年まで遡ります。もともと家具職人であったカスパー・ファーバーが鉛筆の製造を行い、その後、鉛筆の長さ・太さ・硬度の基準を作成しました。この基準は 250 年以上経った今でも世界中で使われており、同社で製造される木軸の鉛筆は年間 18 億本（！）にもなるそうです。

ヒマラヤ杉が使われた木軸と化粧箱

そのファーバーカステルから発売されている代表的な商品に「パーフェクトペンシル」という鉛筆があります。それは、紙に書くという動作に必要なすべての機能を１本の鉛筆に盛り込んでおきながら、秀逸なデザインをあわせ持ち、「完全な筆記具」と呼ばれています。

どのような商品か具体的に紹介すると、まず鉛筆として書けるのは当たり前として、尻軸に消しゴムが付いています。ここまではよくある形なのですが、さらにプラチナコーティングされた金属製の尻軸キャップには鉛筆削りの機能がついており、取って付けたような違和感がまったくないデザインで収まっているのです。クリップにはスプリングが内蔵されており、スーツのポケットに差し込んでも生地を傷めることがなく、差し込みは軽いのですが、抜くときは少し力が必要なように工夫されていて、ここでも使い勝手の良さがキラリと光ります。

プラチナコーティングされたキャップが存在感を放つ

しかし、最も魅力的な部分は、老舗ブランドという格調の高さと作りの豪華さが、鉛筆という存在の軽さと見事なギャップを生み出していることでしょう。これこそが小物好きの魂をユサユサと揺さぶるのです。

モノの作り方や発展には、大きく分けて２つのパターンがあります。１つは最低限まで機能をそぎ落としてシンプルに洗練されていくパターンで、もう１つは使用される現場での使い勝手を考慮して、より必要な機能をマルチに取り入れて完成していくパターンです。このパーフェクトペンシルはまさに後者で、書くというシチュエーションに特化して、必要とされる機能を盛り込んだ完成型なのではないでしょうか。

ドイツという国は、職人気質な部分が日本人に似ているとよく言われます。筆記具が生まれてから現代までの長い歴史のなかで、エポックメイキングな商品が生み出されたタイミングがいくつか存在しますが、そのほとんどが日本かドイツで生み出されたものだったりします。次回以降でそれらを少しずつ取り上げていきますが、双方に共通しているのは、現状に満足せず常に進化し続けるという精神なのではないでしょうか。

絵本って!!

（白）

『こちら たこたびょういん』

岩田明子 作・絵
（PHP 研究所）

風が冷たくなり、季節の変わり目に気になることといえば「風邪」。

悪寒がして、のどが痛くて、熱が出て。もしかしたらインフルエンザ!?なんて、忙しいこの時期に風邪は大敵です。

すぐに病院に行けるといいのですが、仕事や忙しいのを言い訳になかなか足が向きません……。行けば痛いことをされるかもしれない、という恐怖感も相まってなおさらです。

今回ご紹介する絵本は、病院のお話です。こんな優しくてユーモアいっぱいの先生と看護師さんなら！　と思える楽しい１冊です。

＊

あたふた　あたふた。
たこたびょういんの　おいしゃさん、
たこた　こたこさんが　やってきました。
ぼうやの　こたろうも　いっしょです。
いつも　おちついているのは、
かんごしの　するめ　いかこさん。
こたこさんと、いかこさんは次々と来る患者さんを応対していきます。

＊

「え～っ！」と思うような症状を抱えた患者さんが現れるのもさることながら、その治療方法もとてもユニークです。海の生き物の特徴をそなえた患者さんの身になって（？）、治療を行なう姿には思わず笑みがこぼれます。楽しいすごろくのおまけ付きなので、病院嫌いのお子さんを持つ親御さんにもおすすめです。

ワード マスコットキャラクター 浸透企画

トコトンくんをさがせ

3

今回は、今年の夏、WORD が出展、参加しました「第 19 回 東京国際ブックフェア」の会場、「東京ビッグサイト（東京国際展示場）」から！こんなところにもトコトンくんはしっかり潜んでいるのです。（オ）

passenger ticket and baggage check
Arikawatravel
アリカワトラベル 06

「暮らしの道具」後編

前編から半年が過ぎてしまいました……
もう忘れられているとは思いますが、
強引に後編へ進みます。 笑

三重県からスタートした日帰りうつわ旅。
2軒目は雑誌『Richer』で「ものつくりとくらし」の
連載を持たれている山本忠臣さんの
「ギャラリーやまほん」さんです。
昨年、烏丸五条にも「うつわ京都やまほん」が
オープンし、今秋話題だった阪急百貨店二期棟オープン時には
「ギャラリーやまほん展」を開催されるなど、こちらも旬なところ。
うつわ好きの聖地ともいうべきギャラリーの
滋賀県伊賀上野の“本丸”へと足を踏み入れました。

もけもけな岩谷さんの作品

錚々たる作家さんのうつわがズラリで、
垂涎なのは聞いていましたが、まずは「岩谷雪子展」を見学。
身近な植物を自ら採集し、制作されたインスタレーション作品、
造形作品などが展示されていました。はかなく、強く、そして、かわいい。
植物が持つ力に岩谷さんのエッセンスが加わって
なんとも不思議な空気感が漂っています。

先日、瀬戸内生活工芸祭で偶然ご本人にお会いしましたが、
ナチュラルな方で作品のイメージと重なりました。（瀬戸内生活工芸祭のお話は、いずれまた）

岩谷さんの展示の後は、いよいよショップゾーンへ。
あのうつわもいいし、このコップもすてき、そのお鍋があれば……と
欲しいものがありすぎて、ありすぎて、選ぶのが楽しくもつらい…… 笑
有り余る財があれば! とぶつぶつ云いながら、
今回はやまほんさんオリジナルの伊賀焼のおひつ
「飯櫃ころりん」を連れて帰りました。
冷えたごはんを入れてもかたくならず、
レンジにも入れられ、さらに蒸し野菜もつくれる。
なんてすばらしいのでしょう!

飯櫃ころりん

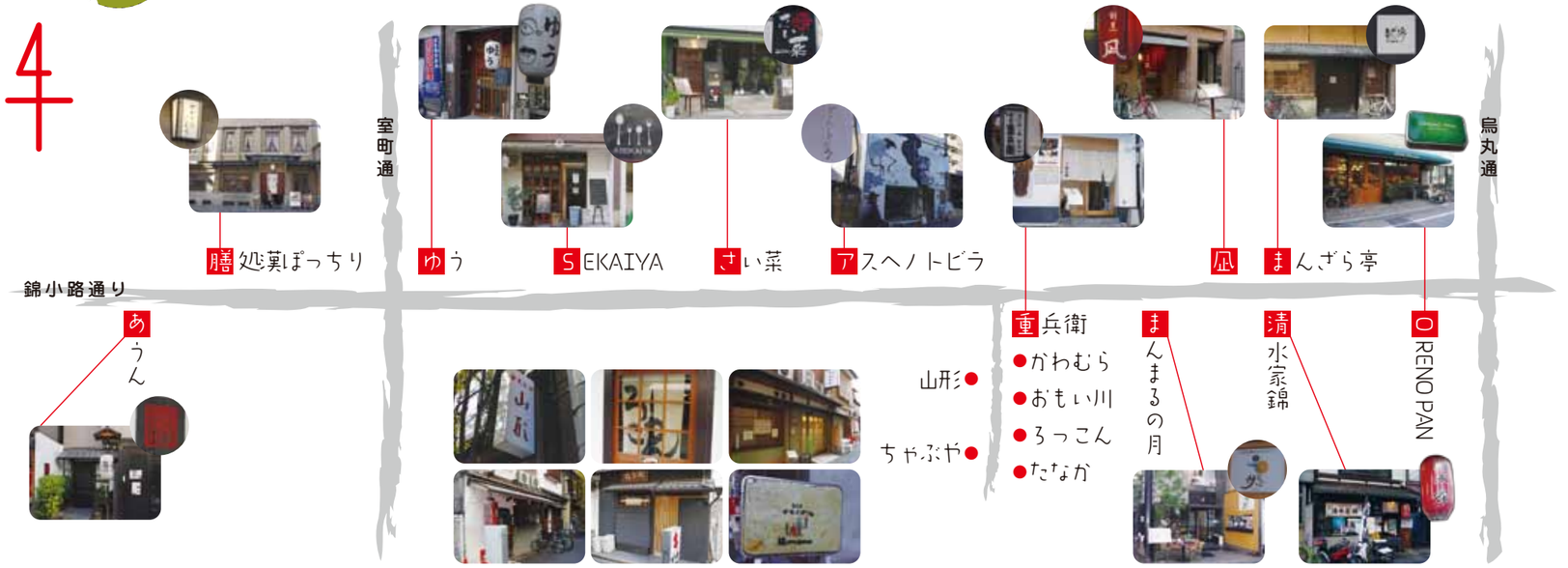
水屋棚が溢れてきたので、厳選して買わないといけないのですが、これからもうつわ旅は続きます。

そうそう、やまほんさんにはカフェもあります。
すてきなうつわでいただくカフェ・オレは絶品。
こちらもぜひ。

覚え書き
ギャラリーやまほん
カフェ ノカ
（三重県伊賀市丸柱 1650）

骨屋町ぶらり散歩⑪ 錦小路通りを烏丸から西へ

4



錦小路通りは寺町から高倉までの市場が有名だが、烏丸から西にもいろいろな食べ物店が増え、入れ替わりも激しい。つい最近も、烏丸からすぐのところにパン屋「**ORENO PAN**」ができていた。その続きにあるのが、北の「**まんざら亭**」と南の「**清水家錦**」。「まんざら亭」は京都市内に展開するチェーン店の１軒で、「清水家」は蛸薬師通りから移ってきた店。どちらも居酒屋で、味は期待しないほうがよい。

「まんざら亭」の並びにある「**凪**」は、何度か行ったことのある割烹。味は西洋のお母さん（マアマア）。北側だけを追うと、辻仁成プロデュースのごはんば～、「サヨナラノアトデ」改め「**アスヘノトビラ**」、和食の「**さい菜**」、洋風の「**SEKAIYA**」、美味処「**ゆう**」と続く。どこも１～２回ほど行ってそれっきり。要するに、私のアンテナにはあまりフィットしなかった。

他方、南側では「**まんまるの月**」、寿司の「**重兵衛**」が１年前ぐらいから開店しているが、どちらもよく知らない。それよりおススメは右隣の路地。割烹「**かわむら**」、フレンチ「**山形**」、串揚げ料理「**たなか**」、居酒屋「**ろっこん**」、焼鳥「**ちゃぶや**」と、魅力的な店が軒を並べている。特に「かわむら」と「山形」は、かつて室町着物問屋の旦那衆をお客にしていただけに、味は確かであるが、室町の凋落で元気がなさそうだ。同じ路地にあった「おやじ野」は、早々に見切りをつけて祇園に移った。なお、飲みたりない人には、「**おもい川**」というバーも東側にある。日本舞踊の師匠が弟とやっていたが、たぶん今もそうではないだろうか。

室町を越すと店がめっきり減り、目立つのは中華の「**膳処漢ぽっちり**」と割烹「**あうん**」ぐらい。このうち、「膳処漢」は関東系チェーン店で、お茶が有料である。食事のときに無料のお茶を用意しない店は、商魂が透けて見え、日本人として基本的に好きになれない。

【完】
（ひ）